

A Frequency-Based Semantic Classification of Nouns Derived from the Verbs of Action / Operation

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-05-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中尾, 桂子 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6423

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



形態別使用頻度に基づく転成名詞の意味分類一考

—「動作・作用のありさまなど」を表す 5 動詞の場合—

中 尾 桂 子

概 要

動詞が品詞転成して名詞になった転成名詞は、意味分類に応じて統語上も共通する観点が見られるのか。西尾 (1961) に準じる松村 (2003) の分類で「動作・作用のありさま・方法・程度・具合・感じなど」の意味分野に分類されている転成名詞のうち、BCCWJ で用例数の多い 5 つの動詞を、その形態別使用頻度を指標にクラスター分析、因子分析をかけて、使用形態と意味上の分類の関連性を見た。結果、意味上、同カテゴリーであっても、統語上の振る舞いには異なる傾向のある語があった一方で、共通する使用形態も見られた。意味分類上の枠組みと使用形態の頻度との関連性が認められるとは言え、振る舞いの異なるものがあることで、カテゴリー、また、分類基準再考の余地も考えられる。

【キーワード】 転成名詞、動詞連用形名詞、クラスター分析、因子分析、日本語初中級学習者

1. はじめに

動詞、「眺める」から派生した名詞、「眺め」は、元の動詞の連用形が名詞に品詞転成したものである。サ変動詞の語幹となる「動作性名詞」とは異なる性質のため、「転成名詞」や「動詞連用形名詞」などと呼ばれる。本稿では転成したことに焦点を当て、転成名詞と呼んでおく。このような転成名詞は、母語が動詞述語文中心の言語話者である初中級の日本語学習者の作文で、しばしば間違っていて使用されている。たとえば、(1)や(2)のようなものであるが、動詞述語文の格構造の中で、不完全な意味が補足されることなく使用されるものである(例 1, 2 とともに、誤記等を含み、表記は原文のまま)。

- (1) きれいな海とながめがあります。(スペイン人学習者の自由作文「私の町」に現れた誤用例)
- (2) 途中、日が昇り、ツバメなどの鳥類が海の水面を飛び交う時、すっかり優美なながめを与えました。(寺村 1990 よりマレーシア人学習者の自由作文に現れた「慣用的な動詞句」の誤用例)

このような誤用に対する日本語教師の反応を見ると、多くが、品詞や慣用表現、すなわち、共起語のミスマッチの問題だと受け取るか、辞書で見つけた母語の対訳を使ったことで生じる問題だと考えるようである。そのため、「ネイティブはそう言わない」とか、「普通こう言う」などと、慣用表現として扱い、誤用の度に暫定的に添削することで学習者が理解したと済ませてしまう。これは、語彙量が少ない日本語初中級レベルの学習者には、誤用である理由の説明が難しいためである。

転成名詞の誤用は、単純に慣用的だからと説明するだけでは済ませられない問題があると承知されているが、多くの場合、誤用である理由の説明が抽象的にならざるを得ない。たとえば、(1)を

「ながめがいい」「いいながめです」など、慣用的な共起語で構成される句の単位で「きれいな海」と合わせ、「きれいな海はながめがいいです」としても、依然、据わりが悪く、「きれいな海がある」とこと、「いいながめである」ことを1文にしてつなげられない。これは、西尾(1961)が考察したように、転成名詞には、通常の名詞のような、意味として指示するもの全てを統括して表す働きがないからである。そのため、(1)を違和感のない文にするには、「○○岬から、大西洋のきれいな海が見渡せて、それはとてもいい眺めです」と、「ながめ」が、見渡した結果の、その内容のみを指し示すことを明示する語が必要になる。したがって、主題「それは」などを「眺め」の前に置か、「きれいな海があって、けしきがすばらしいです」などと、前提を明示せずとも、単独で使える名詞「けしき」などを使用するのがよい。だが、以上の説明例からもわかるように、なぜ「きれいな海」は「いいながめ」にならないのか、また、「ながめ」ではなく、「けしき」の方が自然な表現になるのかについての説明が抽象的になってしまう。

そもそも転成名詞とは何か。また、全ての転成名詞を同様に考えていいのか。転成名詞には不明な点が多い。同類の誤用を繰り返さないよう、日本語学習者にわかりやすく説明するには、転成名詞の不完全性と守備範囲、存在理由を教師側がより明確に意識していく必要がある。だが、西尾(1961)が指摘しているように、全ての動詞連用形が名詞に品詞転成されないという点だけから考えても、意味や、使用方法において、完全に名詞としては振る舞えないと考えられる点や、使用上、なんらかの傾向があると予測できる。にもかかわらず、名詞性と名詞性の低さがどのような部分に現れるかを見極めるためには、依然、構造上も意味上も、分析、整理上の課題が残る。日本語教育においては、文にする場合に、どのような形で使用するのか。それには傾向があるのか。あるいは、傾向などないのか。少しずつでも、ある程度形式的な性質が見渡せるような手がかりを得られれば、転成名詞を常に暫定的な対応で今後に見え置く前に、未然に誤用を防ぐ指導ができるのではないか。

何か糸口が見つからないかと、本稿では、松村(2003)が意味で分類した転成名詞のうち、「動作・作用など」(a. 動作・作用そのもの(～スルコト)、b. 動作・作用の内容、c. 動作・作用のありさま・方法・程度・具合・感じなど)と、「動作・作用の所産・結果」(a. 他動詞から、b. 自動詞から)の2つの大分類の中の5つの意味分野の語に対して、なんらかの傾向が見いだせるかを念頭に、まず、①使用頻度の多いもの、ならびに、動詞的な性質が強そうなもの、②使用頻度の多いもの、ならびに、名詞的な性質が強そうなものを、その使用形態別に考える。ついで、選んだ語を変数にして、それらの語の文中での使用上の形態をケースとし、統計的な分析を行って、意味分野別に、連体修飾節を構成する成分や述部の構成要素といった使用上の形態で分けられるか、また、傾向があるかを探る。本稿は統語上の形態という観点から、転成名詞の特徴について考えるものである。

2. 先行研究

全ての動詞の連用形が転成名詞になるわけではなく、転成名詞は、動詞の30~40%で見られる現象である(金2003)。その割合は、特殊なものとして無視できるほど少量でもなく、また、名詞と動詞の連続した位置づけの範疇の問題であることから、これまで、言語学や国語学の観点から多くの分析がなされ、語構成や統語上の形態的な特徴、意味、用法で転成名詞の分類がなされてきた。古く、山田(1936)や、西尾(1961)は、形態上の特徴で分けた後、意味上の特徴で分類している。これらの考察をベースに、その後、複合語の問題として(山田1963、奥津1974、村木1981、加藤1987)、また、結果解釈の観点(八木2012)、プロトタイプの観点(岡村1995)、さらに、意味上の

特徴で細分化（山本 1991, 松村 2013）など、いくつかの方向に別れて分析が進められている。この現代語での研究の端緒となっている西尾（1961）の「連用形名詞」の定義は以下のものである。

「(試験を) 受けに行く (来る)・受けは (も・さえ等) する (しない)・お受けになる」などの〈受け〉のような用法は、連用修飾語をとることができ、多くの動詞に普遍的にみられる、動詞と名詞の両性質を有する用法であって、これらは未だ連用形名詞とは考えない。〈中略〉「彼は (友人間の) 受けがよい」の〈受け〉のような場合には、すでに連体修飾をとり得るから、名詞に転じたものとして、連用形名詞の範囲に含まれる。

西尾（1961）は「連用形名詞」、すなわち、本稿で言う転成名詞を、被連体修飾語であるかどうかで定義づけている。そして、語構成上の成り立ち方を「形式」として、まず、大きく、1, 2に分け、ついで、「い」「ろ」以下に分類している。しかし、この分類では、上の定義で分けた「動作性」をなくした名詞となっているのか、複合化した際のペアの名詞で動作性が消えているのかわかりにくい。

1. 動詞連用形だけで成り立っている名詞

- 1-い. 連用形一つで成り立っているもの (遊び, 扱い, 救いなど) …………… (A)
- 1-ろ. 連用形二つ (以上) で成り立っているもの (受入れ, 請負, 組立てなど) …………… (B)
- (売れ行き, 飛び読み, 切り売りなど)…………… (C)
- (売り買い, 貸し借り, 上げ下げなど) …………… (D)

2. 動詞連用形を含んでいる名詞

- 2-い. 下位成文として (雪どけ, 火入れ, ねじ廻しなど) …………… (E)
- 2-ろ. 上 (中) 位成文として (干し草, 届け先, 飛び地など) …………… (F)

西尾（1961）は、また、宮島（1956）に重なるとしながらも、「動詞の意味が名詞化される、され方についてその諸類型」を次のように考えている。

1. 動作・作用など

- イ 動作・作用そのもの〔何々スルコト〕泳ぎ, 調べ, 貸し出し
- ロ 動作・作用の内容〔何々スルトコロノコトガラ〕考え, 教え, 望み
- ハ 動作・作用のありさま・方法・程度・具合・感じなど滑り (がいい), すわり (が悪い)

2. 動作・作用の所産・結果〔何々シタモノ〕

- イ 他動詞から〔何カヲ何々シタ結果デキタモノ〕包み, 貯え, 綴じ込み, 割り当て
- ロ 自動詞から〔何カガ何々シタ結果デキタモノ〕余り, 固まり, 氷, くぼみ

3. 動作・作用の主体〔何々スルモノ・人。ソレ (ソノ人) ガ何々スル〕

- イ 人をあらわす〔何々スルモノ (コトヲ業トスル) 人〕, 見習い, 手伝い, 付き添い,
- ロ 人以外〔何々スルモノ〕流れ, 妨げ, 支え,

4. 動作・作用の客体〔何々スルモノ・人。ソレ (ソノ人) ヲ何々スル〕つまみ, 差し入れ, 手揚げ

5. 動作・作用の手段〔何々スルタメノモノ。ソレデ何々スル〕はかり, はたき, カン切り

6. 動作・作用に向けられる目標〔何々スル (タメノ) モノ。ソレニ何々スル〕こぼし, 糸巻

7. 動作・作用の行なわれる場所〔何々スルトコロ〕通り, (地の) 果て, 受付
8. 動作・作用の行なわれる時間〔何々スルトキ〕暮れ, 終わり, 夜明け

この西尾(1961)の意味による分類が、その後の転成名詞の研究の発展につながっているのであるが、西尾(1961)には、現在の視点で見ると、人道上、問題がある例や、もはや使用されないと考えられる語も多く、また、分類上、疑問がある部分も多い。本稿の分析では基本的に西尾の分類基準に従うが、8類型の西尾(1961)を7類型に修正し、用例を再検討してある松村(2003)の意味分類(巻末資料)と語彙リストを利用する。

3. リサーチデザイン

3.1 研究目的とRQ

転成名詞は、西尾(1961)も金(2003)も、動詞の全てがそうなるわけではないとしているように、数は少ないが、その振る舞いが興味深く、また、初中級以降の日本語学習者の作文指導時の課題としても、問題の根が深いという点で、実践的な観点からの整理が望まれるものである。

先行研究では、転成名詞の意味分類が多く、作文指導において必要になる「使用上の形態」といった統語上の注意点を整理する観点から見ると、その情報量は少ない。たとえば、修飾語と共起したユニットを形成するものか、それとも、動詞文の中で単独の成分として使用できるのか、または、「です」「だ」と合わさった叙述文での使用が多いのか。また、教育上、その頻度から考えて、使用上の形態について注意すべきか、暫定的に慣用句として覚えておけばいいという対処で済ませられるものかなどの情報が望ましい。日本語初中級学習者の作文指導時に役立つような観点を得ることを考え、文中で使用する際の形態的な特徴での共通点を確認したい。

本稿では、松村(2003)の分類のうち、特に、意味の上でも、名詞としての振る舞いに不安定なものが多いと予測できる、1. 動作・作用など(a そのもの, b 内容, c 有り様等), 2. 動作・作用の結果(a 自動詞, b 他動詞別)の5つの意味分野における転成名詞83語の特徴を調べる。以下がリサーチクエスション(RQ)である。

RQ1 動作, 作用の意の転成名詞は、使用上, 名詞としての安定性はどの程度か

- ① 動詞としての利用と, 名詞としての利用では, どちらの使用頻度が高いのか
- ② 動詞と名詞の品詞分類上, 混乱があるか
- ③ 品詞からみて特徴的な転成名詞はあるか。それはどれか

RQ2 安定性の低い転成名詞にも, 使用頻度, 意味分類, 使用形態に, 関連性, 共通点があるか

3.2 データ

『現代日本語書き言葉均衡コーパス通常版』(BCCWJ-NT)からBCCWJ-NT検索用インターフェース「中納言」を経て松村(2003)リストの83語をキーとして検索した結果を利用する。BCCWJ(単にBCCWJとする場合は全てBCCWJ-NTのことである)は、空白・記号・補助記号を除いた検索対象語数が104,911,460語である。今回の全ての検索結果で得られる用例数は、BCCWJの検索対象語104,911,460語、すなわち、1億語あたりの頻度となるため、そのまま、調整せずに比較する。

「中納言」での検索キーとして表1右列に分類されている語は漢字表記上のユレが全て集約された代表表記(漢字表記)で、通常の一般的な日本語の表記法とは異なるものもある。また、元の松

村（2003）のリストにひらがなで記載されていた語の中には、代表表記がいずれに相当するかわからないものがある。それらを代表表記（漢字表記）に替える際、複数の代表表記で補填した。したがって、検索キーは、元の松村（2003）のリストの83語より、7語多い91語となる。なお、「語り」のヨミ「カタリ」「ガタリ」の差は5語程度で、意味、使用上に差がないため、合算している。しかし、「話」の「バナシ」は、強い結びつきの複合語で見られる連濁現象と考え、転成名詞の範疇を超えた別の語と考え、本稿での対象には含まない。

表1 意味分類別検索キーとなる語

意味分野	検索キー
動作・作用	泳ぎ、釣り、笑い、覗き、揺れ、守り、脅し、囁き、しくじり、引っ手繰り、取り調べ、貸し出し、貸し切り、繰り上げ、乗り換え
動作・作用内容	考え、教え、読み、話（バナシ 163 は含まず）、語り（カタリ・ガタリ両合算）、望み、楽しみ、企み、願い、悩み、祈り、勤め
動作・作用様子	暮らし、構え、育ち、成り立ち、付き、滑り、座り、出来、当たり
動作・作用結果他動詞	写し、控え、包み、貯え、稼ぎ、儲け、見積もり、刻み、握り、散らし、借り、貸し、彫り、飾り、下ろし、盛り、開き、叩き、敲き、煮込み、差し入れ、書き置き、書き下ろし、盛り合わせ、綴じ込み、割り当て、眺め
動作・作用結果自動詞	落ち、余り、残り、固まり、聞こえ、響き、氷、染み、凍み、剥げ、禿げ、腫れ、荒れ、凹み、歪み、破れ、罅割れ、浮腫み、気触れ、吹きこぼれ、綻び、汚れ、誤り、狂い、隔たり、ずれ、違い、入り

3.3 手法

3.3.1 データの事前処理

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）から「中納言」を経て検索した結果のうち、表1の検索語の前後20語ずつからなる一行単位の用例から、検索語の前後1語ずつの形態情報を得る。BCCWJで、転成名詞は、基本的に、品詞の大分類が「名詞」として登録されているが、念のため、検索には「語彙素」と「品詞」を指定する。例えば、「泳ぎ」の場合、「語彙素」を「泳ぎ」、品詞（大分類）を「名詞」と指定するわけである。また、「動詞」の「連用形」で利用されている用例数と比較することを考えて、品詞（大分類）を「動詞」、下位分類を「連用形」、発音形出現形を指定して検索した結果を数える。

なお、転成名詞であるのに、動詞の連用形とされているもの、動詞であるのに、転成名詞とされているものなど、品詞の誤認定のうち、特に、動詞連用形+助詞で検索した結果の中の誤認定は、その形態的特徴に動詞性が見られることが原因だと考えれば、品詞分類上の混乱という意味が大きくなる。そこで、動詞については、後続語の品詞を「助詞」とした場合の数を検索し、その中の品詞の誤認定の数を数える。たとえば、「泳ぎ」の場合、語彙素「泳ぎ」+品詞（動詞）+発音形出現形「オヨギ」+後続品詞（助詞）という形の検索結果と、その中の品詞の誤認定の数である。

「中納言」での検索結果のうち、検索語である「キー」列と、その前後の単語がそれぞれ20単語ずつ出力される「前文脈」と「後文脈」を見て、使用上の形態に特徴があるかを観察するのだが、「キー」列の前後の共起関係を見て頻度を数えるのには、AntConcを利用する。AntConcでの処理のために、「中納言」での検索結果の「前文脈」と「後文脈」の単語をスペースで分割した状態

に変更し、さらに、文字コードを UTF-8 にして、テキストファイルに整理する。

このテキストデータ化の際、データから調査対象以外を取り除く。今回、転成名詞は、品詞の「大分類」が「名詞」のものを全て検索結果として取り出してから、個別に対象以外を取り除く。また、品詞の誤認定も、数を数える際に、目視により別に取り除く。文末に移動動詞が来る場合の格助詞「に」（「借りに行く」）など、正しく動詞連用形と判定されているかどうかなど、機械的に拾えないものが多いことによる。さらに、BCCWJ のデータは各段階において人手でのチェックもなされているが、元々のデータに表記ミスがある場合、品詞タグが誤って付与される。この間違いは、キー列の検索結果と前後の単語を見ればわかるので、テキスト化の際に除く。たとえば、語義素読み「借り」が、ひらがな表記の場合に、「仮」など別の意味で使用される場合や、名詞の下位分類が副詞的用法になっているものである。

なお、動詞の「連用形」で利用されている用例のうち、名詞以外の語句と結びついて慣用句の構成要素となっているものがある。たとえば、「入り」が「お」「気」「に」と複合化して、「お気に入り」、「気に入る」などの慣用句を形成するものである。「気に入る」の用例は 162 例あったが、今回は、名詞の複合語を 2 語で構成するものとして数えたため、このような場合は、複合語の数にも、名詞認定の誤用数にも入れていない。

3.3.2 分析の手法と指標

まず、動作、作用の意の転成名詞の、名詞としての安定性 (RQ1) を見るために、検索キーのそれぞれの、そもそもの動詞での利用数と、転成名詞での利用数の差を数える。ついで、動詞と名詞の分類上の混乱を、特に、名詞であるにもかかわらず、動詞として認識されてしまった場合の品詞の誤認定の数を数えることで、統語上の振る舞いの動詞性の強さの判断指標とする。

以上の下調査で、動詞性の強さという観点から見て特徴的な転成名詞を特定するが、それらの文中での使用形態の使用頻度をもとに、意味上の分類観点との関連性があるか (RQ2) を見るためには、統計的な分析を行う。統計分析には、クラスター分析、コレスポンデンス分析、因子分析を考えている。クラスター分析では、ケースを転成名詞、変数を各語の使用形態とすることで、動詞の頻度が高い「動作・作用」の意味分野の転成名詞が、使用形態を、直前、直後の指標に基づいて分類できるかを見て、共通する部分の有無を探る。コレスポンデンス分析は、ケースとなる使用形態のうち、特に特徴も共通性もなさそうなものを削除する際、全体像の概要を掴むために利用する。因子分析は、文中の使用形態が、ある特定の意味分野の語の特徴として特定できるかを見るために実施する。

なお、品詞の誤認定と、文中の形態について補足しておく。まず、品詞の誤認定についてである。転成名詞の名詞としての安定性を考察する観点は様々あるが、本稿では、単純に、BCCWJ の出力結果の中に含まれる、表記ミス以外の品詞の誤認定、特に、動詞連用形の中の誤認定の数で判断する。つまり、本来転成名詞として判定されていなければならないのに、動詞連用形になっているものを、品詞タグの付け間違いとして数え、その数を、転成名詞に対する疑似的な認識のユレと考えて安定性の判断の指標にするということである。もちろん、機械的なミスではあるのだが、このミスは、動詞かどうかを判断する際に、名詞にもかかわらず、動詞として判断されてしまうことに問題の意味があると考えた。名詞としての振る舞いが低いために、動詞として認識されてしまう条件の方が強かったためだという考え方である。品詞タグの付け間違いには、大きく分けると、処理上、形態的に区別が難しく出てくる付け間違いと、そもそも、日本語形態素解析時に利用する辞書を制作する過程で生じる人の感覚のユレによるものがあり、両者は性質が異なる。だが、形式的に

分類できない基準は、日本語学習者にも識別が難しいものとして、まとめて誤認定と見て、品詞としての安定性判断に関する情報だと考えることにした。これは、同音で統語上の関係が同じために機械的に判断される中での誤用を見ることで、疑似的に、基準の中の人の感覚のユレに近いものが見られると考えてのことである。

ついで、指標にする転成名詞の文中での使用上の形態についてであるが、それらは、基本的に、日本語初中級学習者の既習の文法知識でも、その統語上の振る舞いが形態から予測されるものとした。文中での使用形態は、その位置と意味から、大きく三つ、すなわち、転成名詞が被修飾語になる場合、転成名詞が格構造の中の1成分となっている場合、述語を構成する要素となっている場合とに分けられるが、位置の上での形態的な特徴で見ると、それぞれ次のようなものに言い換えられる。連体修飾を受ける場合、連体助詞「の」、イ形容詞、ナ形容詞、動詞が、文中で転成名詞の直前、つまり、すぐ左側に来る。また、直前の他の名詞にすぐ続く場合は、複合名詞である場合が考えられる。さらに、接頭辞が付いて1語となる場合もあるが、これは連体修飾ではなく、単独の1語の扱いだと考えられるものの、左側直前という点では連体修飾等と共通した形態となる。転成名詞が、格構造の中の1成分となっている場合、転成名詞の直前、直後に、格構造の指標である格助詞や係り助詞が来ることが多いと考えられる。また、述語を構成する要素となっている場合は、コピュラ文の指標、いわゆる助動詞相当語句が直後に来る場合が多いだろう。さらに直後、すなわち、すぐ右側に、句読点や、BCCWJで文の切れ目を表す「#」がある場合は、言い切りとして、単独の1語文相当を含み、コピュラ文のカテゴリーに分けられる。なお、ある種の副詞は、転成名詞に直接かかり得るため、興味深いのが、その頻度が10列以下で、1億単位でみれば極端に少ない。品詞タグの誤りや、直後の動詞にかかるものも多く、ほとんどを除外することになることから、他の項目との多変量解析の情報量に組み込むには偏りがあると考え、本稿では対象外とする。

また、少なくとも、直前の2, 3語までは見た方がいいという考え方もあるが、今回は、慣用表現は見ず、初級日本語学習者の文法知識で判断できる単純な形式に留めることにして、直前、直後の1語のみの形式に着目するだけとしておく。以上の転成名詞の文中での振る舞いを判断する使用上の形態を、表2にまとめる。連体修飾時の形や格構造中での使用方法、述語の形態を予測するものである。

表2 使用形態を判断する指標(変数)

直前の形	の	直後の形	の
	ない		が
	V-る		に
	V-た		を
	連体詞		で
	が		係り助詞はも
	を		へ
	に		や
	係り助詞はも		から
	で		だけ、さえ等の副助詞
と	コピュラ、言い切り、単独文		
や	他名詞と複合化		
接頭辞			
他名詞と複合化			

3.3.3 分析の手順

まず、単純に、各検索キーワードで「名詞」と品詞分類されているもの、さらに、それが「動詞（連用形）」と品詞分類されているものの頻度を数え、動詞利用と名詞利用数として比較する。ついで、名詞と動詞の混同状況を見るために、「動詞」のうち、「書字形読み」が「動詞」の「連用形」と同じもので、かつ、その後に「助詞」が後続しているものの中の転成名詞の頻度を数える。また、「名詞」の中に、誤って含まれている「動詞」の数も、一応、数えておく。

一方、転成名詞の文中での使用上の形態と、意味分類を使用頻度での関連づけるため、統計的手法を用いて、複数の変数間の関係から、変数の共通性や独自性を確認する。転成名詞の用例グループの中に、形態的な特徴が要因として関係するかどうかという観点で捉えることにして、転成名詞の前後の形態を変数とし、語をケースとして、表4の指標に基づき、表5の頻度表に整理した後、クラスター分析、因子分析をかける。この際、尺度差はないものとして頻度は調整しない。統計分析では、文中での転成名詞の使用上の形態をケース、語を変数とする。クラスター分析には、CollegeAnalysisVer.5.0を利用し、因子分析には、Excel[®]のアドイン試用版を利用する。

4. 結果と考察

4.1 動作、作用の意の転成名詞は、使用上、名詞としての安定性はどの程度であるか

4.1.1 動詞としての使用頻度と名詞としての使用頻度、特徴的な意味分野

検索語 91 語に対して、各語ごとに、転成名詞と動詞連用形の使用頻度に差があるか、仮説検定を行ったところ、91 語中 83 語は名詞使用傾向が高いか動詞使用傾向が高いかで分かれた。名詞として使用されることが有意に高い語は 44 語で、動詞（連用形）での利用頻度が有意に高い語は 39 語であった（44 語と 39 語の頻度には有意差なし $\chi^2 = .35, p = .552$; 石川 2007 の高見のマクロを利用）。

また、転成名詞として使用される傾向があると考えられる 44 語のうち、全く、動詞連用形の使用が見られない語が 6 語あった（表3）。「書き置き（書き置、書置を含む）」の動詞連用形利用は 1 例あるが、これも含み、「釣り」、「引っ手繰り」、「たくわえ（貯え・蓄え）」、「氷り（氷、凍りも含む）」の 6 語は、使用上、転成したという「記憶」が薄れつつある語だと考えられる。

表3 転成名詞としての使用しか見られない語

No.	意味分野	検索キー	転成名詞	動詞連用形
2	動作・作用	釣り	2,006	0
10	動作・作用	引っ手繰り	65	0
40	動作・作用結果他	貯え	116	0
42	動作・作用結果他	儲け	458	0
58	動作・作用結果他	書き置き	32	1
70	動作・作用結果自	氷	1,976	0

一方、転成名詞リストに記載されているが、BCCWJ では転成名詞としての使用例がなかった語が 1 語あった。「吹きこぼれ」である。テレビの料理番組などで「吹きこぼれに注意してください」等の表現を聞いたことが 1 度ならずあることから、代表表記となる漢字を替えて検索したが、使用例がなかった。単に、BCCWJ の形態素解析の辞書に名詞として登録されていない可能性もあるが、動詞連用形用法の使用例がそもそも 20 語と少なく、動詞連用形の形や名詞としての使用を判断す

形態別使用頻度に基づく転成名詞の意味分類一考

る以前に、そもそも、BCCWJでの「吹きこぼれ」の用例自体が少ないもの、つまり、語として認識されて日が浅い新語だと考えられる。

さらに、8語（「ささやき（囁き）」： $\chi^2 = 1.72, p = .190$, 「とじ込み（綴じ込み）」： $\chi^2 = .64, p = .424$, 「ほころび（綻び）」： $\chi^2 = 2.47, p = .116$, 「繰り上げ」： $\chi^2 = 1.47, p = .226$, 「差し入れ」： $\chi^2 = 1.32, p = .250$, 「書き下ろし」： $\chi^2 = 2.65, p = .103$, 「ひび（罅）割れ」： $\chi^2 = .58, p = .446$, 「狂い」： $\chi^2 = 3.11, p = .078$ ）には、転成名詞での使用頻度と動詞連用形使用頻度の間に有意な差がみられなかった。表4は動詞連用形での使用頻度が高い語のリストであるが、右端に「有意差なし」とあるものが、この8語のうちの6語である。

表4 動詞連用形での使用頻度の方が多い語

意味分野	検索キー	転成名詞での使用頻度	動詞連用形での使用頻度	
動作・作用	泳ぎ	136	348	
	覗き	52	434	
	揺れ	572	1,548	
	守り	732	1,795	
	脅し	306	457	
	繰り上げ	253	282	有意差なし ($\chi^2 = 1.47, p = .226$)
	乗り換え	342	475	
動作・作用内容	考え	9,467	78320	
	教え	1,537	30,005	
	読み	1,076	4,350	
	語り	260	1,427	
	願い	4,408	17,189	
	勤め	739	4,080	
動作・作用様子	暮らし	3,197	3,495	
	構え	772	1,591	
	育ち	563	653	
	成り立ち	166	206	
	付き	324	5,558	
	滑り	377	574	
	座り	224	1,415	
	出来	785	112,012	
	当たり	673	3,009	
動作・作用結果他	控え	226	1,866	
	刻み	209	308	
	握り	162	650	
	借り	366	4,036	
	貸し	474	2,137	
	下ろし	596	3,095	
	開き	601	2,921	
	叩き	427	819	
	差し入れ	188	212	有意差なし ($\chi^2 = 1.32, p = .250$)
	書き下ろし	58	78	有意差なし ($\chi^2 = 2.65, p = .103$)
眺め	580	4,743		
動作・作用結果目	落ち	851	7,514	
	聞こえ	135	6,967	
	剥げ	7	176	
	腫れ	208	528	
	荒れ	81	841	
	破れ	102	695	
	罅割れ	186	202	有意差なし ($\chi^2 = .58, p = .446$)
	気触れ	30	93	
	吹きこぼれ	0	20	
	狂い	179	215	有意差なし ($\chi^2 = 3.11, p = .078$)
ずれ	700	886		

以上、品詞別に使用頻度を数えその頻度を比較した結果からは、転成名詞の用法だけの語、名詞としての利用頻度の方が有意に高い語、動詞連用形での使用が有意に高い語、そして、動詞連用形でだけ使用例がある語、すなわち、転成名詞としての用法が見られなかった語の4種にわかれる。動詞連用形での使用が有意に高いことで、即、名詞性が低いと判断するのは短絡的ではあるが、ある程度は、動詞としての性質の方が高いと考えておいてもよいとするなら、転成名詞といえども、その名詞としての安定性には連続的な差があると考えられる。

また、「動作、作用そのもの」「動作、作用の内容」などの意味分野別に、名詞使用が多いか動詞使用が多いかを見ると、7分野のいずれでも、名詞での使用頻度が多いものと動詞での使用頻度が多いものが、それぞれほぼ半数ずつある。松村（2003）の計画的なリスト化による結果だと言えるのかもしれないが、一方で、「動作、作用のありさま・方法・程度・具合・感じなど」の分野の語は、全ての語が、動詞連用形の使用頻度が有意に高い語であることからすると、意味分野により、転成名詞の形態的な性質にある程度の傾向があり得る可能性も考えられる。ただ、この「動作、作用のありさま・方法・程度・具合・感じなど」の分野に該当する語は、松村（2003）のリスト上、その数がそもそも少なめで、また、「動作、作用のありさま・方法・程度・具合・感じなど」とされているように、分野としての意味上のまとまりも低い。意味のバリエーションからして、この分野の転成名詞には、共通する特徴が少なく、また、動詞寄りの性質のものが多いのではないかと考えられるが、もう少し、この意味分野に相当する転成名詞の数を増やして、再度使用差の確認を行った方が良いだろう。

4.1.2 転成名詞の品詞認定の乱れから見た名詞としての安定性

たとえば、転成名詞「泳ぎ」を、動詞連用形での使用があるか確認するために、「中納言」の検索キーを、語彙素「泳ぎ」+品詞（動詞）+発音形出現形「オヨギ」+後続品詞（助詞）と、キーの右側に継続する語の品詞を「助詞」と指定した場合、動詞連用形での使用としながらも、いくつかの転成名詞が検索結果に出てくる。「泳ぎ」の誤認定では、例(3)、(5)のように、係り助詞「は」「も」や、例(4)のように、並列のための助詞「や」が続くものの中に、名詞なのに、動詞と誤認定された例が見られる（1行は転成名詞とその前後10語ずつ。「|」は単語分割位置で、（ ）は後続する品詞を表す。＃は文頭）。

- (3) の|選手|でした|の|で|、|今|で|も|泳ぎ|(は)|苦|で|は|あり|ませ|
 (4) 子供|と|とも|に|過|ご|した|。＃泳ぎ|(や)|魚|釣|り|を|教|え|て|も|ら|っ|た|り|、|一|緒|に|
 (5) 店|を|辞|め|る|こ|と|に|な|っ|た|順|さん|は|、|泳|ぎ|(も)|う|ま|か|っ|た|か|ら|、|H|を|背|中|に|

このように、転成名詞であり、本来は「名詞」であるべきものが、「動詞連用形+助詞」と品詞タグがつけられて出てくる場合の、品詞タグの付け間違いの数を見ると、「動詞連用形+助詞」の結果の数の中に、付け間違いの数が含まれる割合が0%のもの（付け間違いが全くないもの）から、100%のもの（出力結果全てが誤用だったもの）まで存在する。そして、このような品詞情報の間違いは91語中、56語に見られる。

この誤認定の要因と考えられる形態的特徴は、語によって異なり、「泳ぎ」では係り助詞が継続する場合に、本来、転成名詞である語の品詞が動詞連用形となっている場合が多い。たとえば、「借り」の場合は、「あいつ|に|借|り|(が)|あ|る|ん|だ|」、「旅|の|借|り|(と)|は|そ|う|し|た|も|の|だ|」など、格助詞がや並列助詞トなどと組み合わせさせた形態の場合に、名詞を動詞として認定する誤り

が多く見られる。

また、品詞情報のつけ間違いが見られた語の平均数は、転成名詞の使用頻度が高い語の場合、平均 12.3 回で、動詞連用形の使用頻度が高い語の場合、平均 19.7 回である。「動詞連用形」としての使用頻度が転成「名詞」での使用頻度より高い語の場合に、品詞のつけ間違いが多めになる。

一方、「釣り」、「儲け」、「氷」など、動詞連用形の使用がそもそもなかったものには、検索結果に「動詞」が誤認定で混在することはなかった。転成名詞でのみ使用されるような語は、形態素解析や、構文解析などの機械的なタグづけでも問題がないほど、統語上の振る舞いが明確に名詞のものだからか、または、人手でもユレなく修正できるものだからか、いずれにしても、転成名詞としての認識に誤りがなかった。また、名詞での使用が有意に多い転成名詞の中の品詞の誤認定数を見ると、多くが、各語の総使用数の 5% 以下である。また、既に、かなり名詞の振る舞いをする名詞寄りだと考えられる語の場合は、動詞使用例がないが、名詞として判定された語の中の、動詞と誤認定される数もない。

ただし、名詞として使用される頻度と動詞として使用される頻度に有意差があることと、動詞連用形の品詞タグの中に転成名詞が混在するという品詞の誤認識の有無には、さほど関連性があるようでもない。品詞の誤認定は、語の質的な性質の問題というよりは、機械処理上の問題によるところが大きいのだろう。

以上のように、動詞使用がない語には、誤りが見られないことに合わせて、名詞として品詞がつけられていた転成名詞の中の品詞の認定間違いの数が少ないことから、品詞の誤認定は、動詞連用形として出力されるものの方に多めだと考えられた。このことから、文中での語の振る舞いが、完全に名詞として定着している転成名詞は判断にユレがないが、統語上の振る舞いがまだ完全に名詞ではない、動詞寄りの転成名詞の中には、動詞の連用形としてか、転成名詞としてかの認識にユレがあるために、品詞の誤用があるということが言える。そして、そのユレは、前節で確認したように、語の名詞としての性質における、動詞寄りか、名詞寄りかで段階性がある点が影響していると考えられる。そう考えれば、この認定のユレは、語の形態的な特徴と意味の両方にまたがる問題であると言えるだろう。

本節では、転成名詞と同形の動詞連用形品詞の認定間違いが、問題に感じられるほど多い語もあることが指摘された。さらに、転成名詞には、動詞利用か名詞利用かの使用頻度の差があるものが混在しているという事実が確認されたが、そのことから、転成名詞の半数程度が、未だ動詞連用形との境が不確立なものであり、また、その境にはある程度の段階性があるということが考えられた。

4.2 RQ2 使用頻度、意味分類、使用形態の関連性

上の 4.1 で、名詞として使用されることが多い語か、動詞連用形の使用の方が多い語かには、質的な違いがあることがわかってきたが、名詞としての性質上の安定性が、即、転成名詞の使用の制限になっているかどうかはわからない。しかし、一方で、転成名詞を、意味分野という単位で見ると、動詞使用か名詞使用かの頻度には、なんらかの傾向がありそうな分野があった。「動作、作用のありさま・方法・程度・具合・感じなど」の分野である。この分野の語は、全てが、動詞で利用される場合が有意に多い。

そこで、動詞としての性質がより多く残ると考えられる語が多く、その傾向が見だしやすくと考えられる「動作、作用のありさま・方法・程度・具合・感じなど」分野の転成名詞の使用上の形態的な特徴の共通点、相違点を考える。使用頻度の多さから、傾向が一般化しやすいよう、使用頻度の高い語上位 5 語「育ち」「暮らし」「構え」「出来」「当たり」を取り上げ、調査対象の 5 語の文

表5 「動作、作用のありさま・方法・程度・具合・感じなど」の5語の使用形態別頻度

	育ち	暮らし	構え	出来	当たり
前-の	85	1,146	240	281	121
前-な	7	354	56	32	13
前-い	4	192	40	76	33
前-V-る	1	114	127	25	13
前-V-た	1	75	35	7	13
前-連体詞	7	91	40	14	13
前-が	6	30	3	36	33
前-を	1	11	10	3	3
前-に	3	31	18	21	42
前-係助詞はも	74	66	25	52	55
前-で	5	25	5	8	16
前-と	12	59	4	7	11
前-や	0	24	1	2	1
前-接頭辞	1	2	1	0	1
前-他名詞と複合化	296	363	181	1	4
後-の	245	851	86	109	69
後-が	71	211	47	112	126
後-に	28	349	72	45	52
後-を	23	730	147	23	74
後-で	1	3	83	44	30
後-係助詞はも	63	241	54	94	66
後-へ	1	6	1	0	1
後-や	7	40	16	4	4
後-から	3	26	12	2	4
後-副助詞	6	150	8	14	4
後-コピュラ、言い切り	87	376	141	95	323
後-他名詞と複合化	0	0	95	93	42

中での使用形態別頻度を整理した（表5）。

4.2.1 文中の使用形態で概観する5語のまとめ：クラスター分析から

これら5つの転成名詞どうしが、意味分野の上でどのようにまとまっているのか確認したい。表5を元に、使用形態の傾向の類似性を、距離が近いか、または、遠いかで関係を概観するため、クラスター分析を行った。表5の頻度はBCCWJの中の総頻度中の使用数だが、各5語の、転成名詞としての使用数が異なること、さらに、その数が0から1,000までと差が大きいことから、個体間非類似度計算法を、平方標準化ユークリッド距離で、また、クラスター構成法をウォード法にして分析した。平方標準化ユークリッド距離にしたのは、個体間の類似度を、その粗品度から自動標準化して計算するためであり、ウォード法にしたのは、意味的な類似性と形態的類似性の関連性が不明なため、念のために鎖効果の回避を考えたことによる。

形態別使用頻度に基づく転成名詞の意味分類一考

表 6 クラスタ分析結果 (類似度)

クラスター名	クラスター名	類似度
1 E:前-頭	E:後-へ	0.0098
2 E:前-を	E:後-から	0.051
3 E:前-や	C:前-頭	0.0818
4 C:前-を	E:後-や	0.1351
5 E:前-で	E:前-と	0.1817
6 E:前 V た	E:前-連	0.2189
7 C:前-を	C:前-で	0.3333
8 E:前-が	E:前-に	0.4257
9 C:前-を	C:前-や	0.5117
10 C:前 V た	E:後-副	0.6792
11 E:前-な	E:後-に	0.8571
12 E:後-で	E:後-複	1.0506
13 C:前 V た	C:前-が	1.2568
14 E:後-が	E:後-係	1.4347
15 C:前-な	E:前-い	1.6265
16 C:前 V た	C:前-を	1.8126
17 E:前 V る	C:後-で	2.0163
18 E:前-係	C:後-が	2.265
19 C:前-な	C:前 V る	2.6839
20 C:前-な	C:前-係	3.3505
21 E:前-複	E:後-の	4.0216
22 C:前-な	E:後-を	4.6518
23 E:前-の	E:後-コ	6.0007
24 C:前-な	C:前 V た	7.109
25 C:前-の	C:前-複	8.4206
26 C:前-の	C:前-な	11.4018

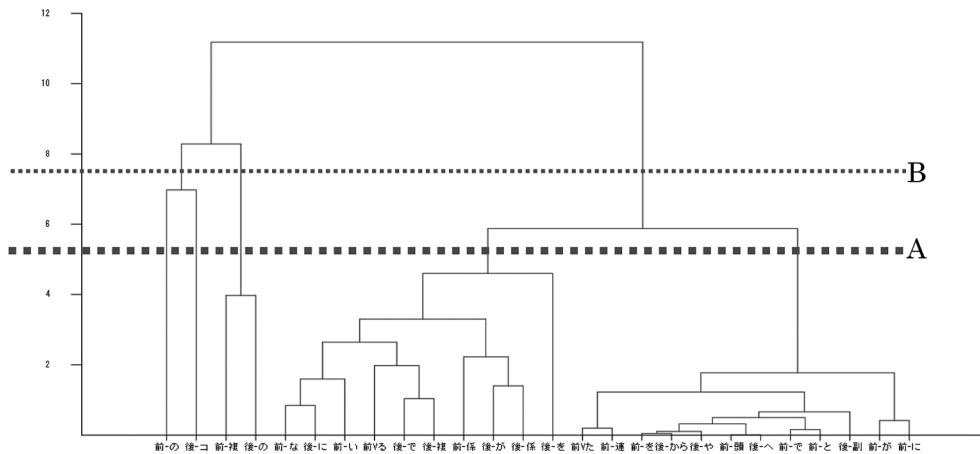


図 1 使用上の形態で分類した場合のデンドログラム

「動作、作用のありさま・方法・程度・具合・感じなど」の5語の使用上の形態の類似性をその距離の遠近で概観した結果が、表6と図1のデンドログラムである。図1を見ると、形態上の使用頻度の差が、各語の特徴を大きく3つに分けている。Y軸上の距離を考えると、カッティング・ポイントを図1の点線Aの箇所に置いて5つに分類したいが、ケースが1つのグループが2つになるため、今回はBの位置で切り、3グループとして考えてみる。

図1のカッティング・ポイントBで見ると、3グループは、それぞれ、次のようなもので構成される。①「前-の」「後-コ」、②「前-複」,「後-の」、③直前に形容詞や動詞等が来て連体修飾節を作る場合や、目的格や主格などを表す「ガ」や「ヲ」などの格助詞を後続して格構造の中の1成文として格助詞を後続する形で使用される場合、動詞の過去形や連体詞、接頭辞が直前に来る場合や、与格や対格などの格助詞が後続する場合を総合したものである。①、②のグループのもの、すなわち、直前に「の」が来る被連体修飾の形態、直後に「コンピュータや言い切り」が来る叙述部を形成する形態、直前に別の名詞がある「複合名詞」の形態、直後に「の」が来て他の名詞を連体修飾する形態の4つが、Y軸上の距離から考えても、5語の弁別上の特徴として大きく影響するものだと考えられる。

また、X軸上で右に付置され、かつ、Y軸上の距離が短い形態は、下位で、ごく近い距離のものとして若干遠めのものに2分されることから、この2つのうちのどちらかが類似性を司るもの、または、無標のものだと考えられる。③を2分する下位のグループは、よりY軸上の距離が短く、早くクラスターを構成した最も右側のクラスターと次にクラスターを構成した左側のクラスターとに分かれているが、右から二番目のクラスターは、概ね、直前に形容詞や動詞等が来て連体修飾節を作る場合や、目的格や主格などを表す「ガ」や「ヲ」などの格助詞を後続して格構造の中の1成文として格助詞を後続する形で使用される場合の形態で構成されている。最も右側のクラスターは、動詞の過去形や連体詞、接頭辞が直前に来る場合や、与格や対格などの格助詞が後続する場合の形態で構成される。

一方、変量間の類似度連続データを相関係数で見て、クラスター構成法を最長距離法で各語の距離を見る(図2)。図2では、Y軸とX軸上の距離を考えると、図2の点線の箇所にカッティング・ポイントを置いた。

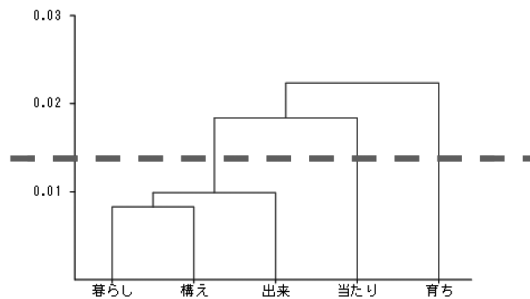


図2 「暮らし」、「構え」、「出来」、「当たり」、「育ち」の使用形態から見た相対的な関係

「動作、作用のありさま・方法・程度・具合・感じなど」の上位5語の転成名詞の関係は、類似する形式で使用される「暮らし」「構え」「出来」のグループと、さらに、「当たり」と、「育ち」といった、文中の使用形態が異なると考えられる3つに分かれる。同意味分野の語ではあるが、使用形態から見た場合には、よく似た使用形態の語と、使用形態が異なる語とがあるということになる。

この5つのうち、「暮らし」と「育ち」がデンドログラムで対照的な位置に現れたことから、因果はないものの、正準相関係数を求めてみたところ（表7）、この2つが、ある種、対局とでもいう関係になるような要因の存在が認められる。

表7 正準相関分析の結果

	正準変量 1	正準変量 2
正準相関係数	0.8215	0.2992
1 群係数		
育ち	0.0425	-1.1967
暮らし	0.976	0.6938
2 群係数		
構え	0.6533	-1.0515
出来	0.4857	1.2913
当たり	-0.0576	-0.2569

使用形態の頻度表（表5）や類似度表（表6）で、「暮らし」、「構え」、「出来」と、「育ち」に差のある部分を見ると、図1の①～⑤のクラスター分類のうち、被修飾語となるか、コンピュータ等による叙述文での使用形態の頻度差の影響がありそうに見えることから、デンドログラムの①②クラスターに付置される形態、すなわち、①「前-の」：直前に「の」が来る被連体修飾の形態、①「後-コ」：直後に「コンピュータや言い切り」が来る叙述部を形成する形態、②「前-複」：直前に別の名詞がある「複合名詞」の形態、②「後-の」：直後に「の」が来て他の名詞を連体修飾する形態の4つが、「育ち」と、「当たり」と、それ以外の「暮らし」、「構え」、「出来」の区分に影響していると考えられる。

そもそも「動作、作用のありさま・方法・程度・具合・感じなど」と、バリエーションの多いことが予想される意味分野であるから、まとまりのあり方に周辺的なものがあることは予想されたが、それが、使用形態から確認できることは、意味分類と形態的特徴との関連性における今後の全体調査の方向性を考える上で有益な情報だと言える。

4.2.2 文中の使用形態から見た5語の特徴：因子分析から

4.2.1で、「前-の」、「後-コ」、「前-複」、「後-の」の4形態が、「動作作用のありさまなど」を意味する5語の独自の特徴を担う形態だと考えられたが、共通する形態と独自の形態があるとするれば、どのような形態的特徴がこの「動作作用のありさまなど」の意味分野の5語の特徴を表す要因となるのか。それについて、クラスター分析で、左から4番目と5番目のクラスターに分類された表5のケースを考え直すと、早い段階で距離の近さからまとめられたクラスターの使用形態上の特徴は、大きく特徴づける要因というよりは、ごく通常範囲でどの語でも利用される形態である可能性が高く、特徴的なものではないものも含まれるはずである。したがって、因子分析の前に、他に影響のないものは除いて、ケースをより絞り込んで見直すべきである。

ケースの見直しのために、ケースと変数の関係をより集約して単純に概観しやすいように、表5のデータに対して、コレスポネンス分析を行い、X軸に第1成分、Y軸に第2成分とした散布図を見てみた。図3で丸く囲んだ各語の周辺に現れるケース（文中での使用上の形態）が各語を特徴づけるものとして視覚的に確認できる。第1成分、第2成分の得点表を参照しながら、図3で、

「コピュラ等」で、「育ち」と「当たり」「出来」がこのケースに基づいて対局の関係にある。第2成分として高い得点のケースは「前が名詞」「後-で」と、「後-を」がマイナス方向で高い。「後続が名詞」となる情報は、第2成分でも高得点であることから、5語に共通する形態の特徴とも考えられるものの、これらを反映する図4（第1成分が横軸/第2成分縦軸）を見ると、「後続が名詞」か「前に名詞」かで、図4のY軸の左右に分けられる。複合名詞の後部となるか、複合名詞の前部となるか、連体修飾を受けやすいか述語の成分や格成分に組み込まれやすいかの差で、「育ち」「暮らし」と、「構え」「出来」「当たり」が分かれ、さらに、X軸の上下で、動詞述語文の格関係の主成分か、それ以外の述語文での、述部、または、叙述成分になるかの差で、「育ち」「構え」と「暮らし」が分かれる要因となっていることが確認できる。

以上の調整の下、表5から6ケースを削除した19のケースで、Excel®を用いて因子分析を行い、表8の因子得点表と表9の因子負荷量の表を得た。

表8 因子得点（回転後）

検体名	因子 1	因子 2
前-の	3.086	0.924
前-V-る	-0.36	-0.026
前-V-た	-0.634	-0.385
前-連体	-0.538	-0.364
前-が	-0.175	-0.833
前-で	-0.605	-0.62
前-と	-0.642	-0.524
前-名複	-1.101	1.917
後-の	0.393	1.493
後-が	0.883	-0.61
後-に	-0.178	0.159
後-を	-0.656	1.467
後-で	-0.024	-0.606
後-係	0.587	-0.42
後-や	-0.675	-0.504
後-から	-0.697	-0.549
後-コピ	0.603	0.428
後-名複	0.733	-0.948

表8 因子得点（回転後）

変数名	因子 1	因子 2	共通性
出来	0.9567	0.1985	0.9546
当たり	0.511	0.1978	0.3002
暮らし	0.577	0.6956	0.8167
育ち	0.0976	0.6852	0.479
構え	0.5016	0.6426	0.6646
因子寄与	1.7704	1.4448	

因子間相関は、5%水準で.47と、これまでの分析からも伺えたように、中程度の相関がある。これはいずれの語でも標準的に使用する形態があることからの影響だと考えられることから、共通する形態というよりは、無標として扱う方がよい形態であると考えられる。そう考えれば、因子分析でも、やはり、特徴的な振る舞いのあるものに集中して見ていくのがよいということになる。

因子軸の回転方法をバリマックス回転と指定した場合の因子負荷量を見ると（表9）、第1因子は「出来」「当たり」の特性を反映し、第2因子は「暮らし」「育ち」「構え」の特性を反映するものとなっている。コレスポンデンス分析で見た第1成分と第2成分とに重なる結果である。第1因子は複合名詞の後部となる性質、また、コピュラや言い切り形態を従える形での使用と考え、叙述

形態因子としておく。第2因子は、第1因子とは逆に複合名詞の前部や被修飾語となる性質だと考え、修飾形態因子としておく。

なお、5語と形態的特徴の相互関係を俯瞰するために、因子分析の結果得られる変数の負荷量散布図と、ケースの因子得点散布図を見ておく。叙述形態因子と解釈した第1因子（コピュラ文や言い切り）は「当たり」と関係が深く、被修飾形態因子と解釈した第2因子（名詞後続、「の」後置で名詞修飾）は、「育ち」と関係があると考えられ、語ごとに使用形態の特徴があることが確認できる。

変数負荷散布図で見ると、変数となった5動詞はいずれも出現位置が近く、ケース因子得点散布図と併せて見れば、そのグループとしての特徴が、特定の被修飾形態と叙述形態にあると考えられる。このことから、転成名詞の意味分野と、その分野内の語の使用形態とはある程度の関連性があり、また、各語が特に持つ性質もその使用形態上で特徴が見られるということが唆される。

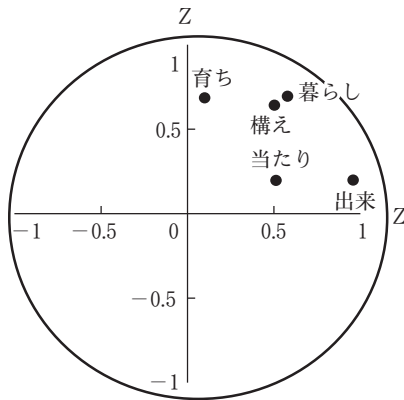


図5 Z_1 と Z_2 の負荷量散布図 (回転後)

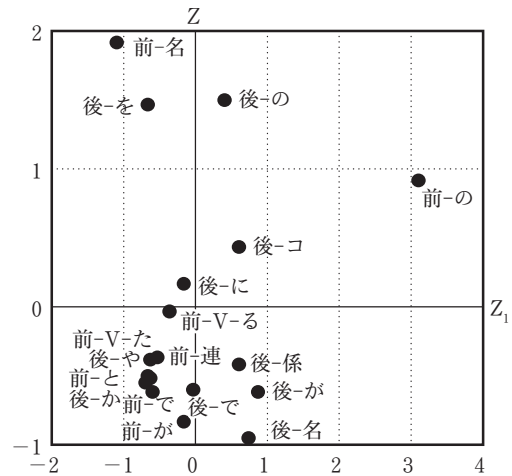


図6 Z_1 と Z_2 のスコア散布図 (回転後)

ただし、横軸を第1成分、縦軸を第2成分として5動詞の対応関係を見たところでは、5動詞には相違点も見られていた。そこで、再度、素データに適当な重みを与えて整理する数量化Ⅲ類を用いて、再度、対応関係を見直してみたところ、図7のように、差が明確に確認された。図7は第1成分、第2成分に基づき、カテゴリウエイトを分布したものである。先に見たコレスポネンス分析は数量化Ⅲ類の一部の手法だと見る向きもあるが、これを見ると、同じ意味カテゴリーに分類されていても、5動詞の形態的特徴が異なることがより明示的に伺える。第1因子の観点からは「出来」「当たり」に「構え」を合わせた3つの動詞が意味的にも統語的にも近く、このカテゴリーのプロトタイプ的なものと言えらるだろう。一方、「育ち」「暮らし」は、先の3つの転成名詞とは相反する統語的特徴がある。もちろん、使い方に違いがあっても同じ意味カテゴリーに入れることに問題はないが、単なるユレと見ても良いのかは、より詳細な検討が必要である。それは、類似の他の意味カテゴリーとも合わせて比較すること、また、使用例、使用時の意味と合わせて検討する問題である。そのためには、カテゴリー別の転成名詞数に差があることから、安定した分析のために、そのカテゴリーに該当する転成名詞を探し、数を増やす必要がある。

形態別使用頻度に基づく転成名詞の意味分類一考

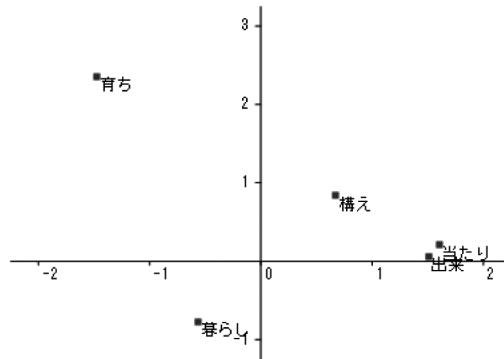


図7 5動詞の対応関係 — カテゴリウエイト — (College Analysis 数量化Ⅲ類)

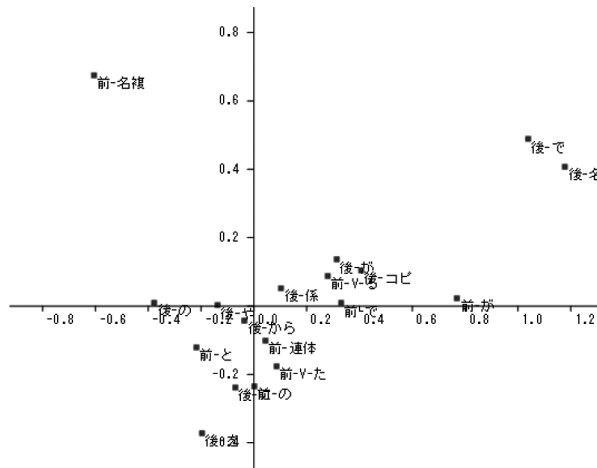


図8 5動詞の対応関係 — 個体ウエイト — (College Analysis 数量化Ⅲ類)

以上、いくつかの多変量解析を用いて同様の分析を繰り返し、少しずつ確認してみたが、「動作・作用のありさま・方法・程度・具合・感じなど」の意味分野に位置づけられる転成名詞には、文中での使用上の形態に違いがあり、語により、使用上の形態に特徴的な傾向があることが認められた。また、同時に、被修飾形態と叙述形態という形態的な特徴では共通したカテゴリーに分類されるものであることも認められた。これらの形態的情報は、動詞としての性質に影響しているのか、意味上の性質に影響するのかは、他の意味分野の分析と比較しながら、さらに考察を続ける必要があるが、意味と使用形態が使用頻度と関連している点が確認できたことは興味深い。

5. まとめ

本稿では、まず、転成名詞の性質を、動詞連用形との関係から概観し、ついで、使用例から品詞の誤認定の頻度を見たが、そこから、転成名詞は主に名詞として扱えるものの、形態的に見ると、名詞としての安定性に影響すると考えられるような形態で使用されるものもあると認められる。

また、以上の下調べから、動詞性が高いと考えられる語で構成されている意味分野の5語を特定し、それらの5語の文中での使用形態における使用上の傾向を、その頻度情報を元に統計的に分析することで、動詞寄りの転成名詞の特徴が特定できるか試みた。結果、転成名詞の意味と、使用上の形態には関連性があり、使用形態には、個々の語を特徴づける傾向があることが確認できた。使用形態の頻度から、使用傾向と意味分野別の傾向がある程度推測できることが確認できたことは、今後の調査の上で、興味深い示唆が得られたと言える。さらに、形態的な特徴が、1つの明確な傾向としてではなく、複数の条件が重なった形でなら提示できそうではないかとも考えられた。今後の分析の際の検討事項である。

今後、さらに、詳細な検証を続けることにより、初中級以上の日本語学習者に、使用上の注意をリスト化するなどの方法で有益な情報を与えられる可能性が考えられるが、本稿での考察は、まだ、形態面からの分析を試みた程度で、一般化するまでには足りない情報が多い。今後は、まず、今回取り上げた意味分野の語を増やして同様の検証を行った上で、別の意味分野の傾向と比較すべきである。また、他の意味分野との比較を通して、各意味分野の特徴として現れてくる使用形態についての概要をまとめ、抽象化、ならびに、一般化を行う必要がある。さらに、指導に利用するためには、一般化した情報の意味分野別、形態別リスト化を行う必要もあるだろう。課題は多い。

本稿は、2015年度統計数理研究所共同研究利用における研究会にて発表した内容を加筆修正したものである。

参考文献

- Ant Conc : <http://www.laurenceanthony.net/software.html>
BCCWJ : http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/
College Analysis : <http://www.heisei-u.ac.jp/ba/fukui/analysis.html>
加藤弘 (1987) 「転成名詞について」『日本語学校論集』, 14, 49-67, 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校.
金姜淑 (2003) 「連用形名詞」『日本語論究』, 7, 299-320, 和泉書院.
石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠 (2010) 『言語研究のための統計入門』三省堂.
松村一登 (2003) 「転成名詞の意味の類型」<http://www.kmatsum.info/lec/meziro/morphology/wordformation2.htm> (2015.12 訪問).
村木新次郎 (1981) 『日本語動詞の諸相』ひつじ書房.
西尾寅弥 (1961) 「動詞連用形の名詞に関する一考察」『国語学』43, 60-81.
奥津敬一郎 (1974) 「複合名詞の生成文法」『国語学』101, 48-34.
佐藤佑 (2012) 「『太陽コーパス』にみる、動詞性名詞「報告」の使用実態」『第2回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』, 77-86.
鈴木重幸 (1964) 『語彙教育』麦書房.
寺村秀夫 (1990) 『外国人学習者の日本語誤用例集』(大阪大学; データベース版, 国立国語研究所, 2011年).
山田孝雄 (1936) 『日本文学概論』宝文館.
山本清隆 (1983) 「転成名詞の語彙的展開」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究』(情報処理振興事業協会), 12.

添付資料

松村一登講義資料（言語学概論，形態論の資料）より

<http://www.kmatsum.info/lec/meziro/morphology/wordformation2.html> (2015.12 訪問)

転成名詞の意味の類型

9. 動作・作用など
 - a. 動作・作用そのもの（～スルコト）
泳ぎ，釣り，笑い，のぞき，揺れ，守り，おどし，ささやき，しくじり，ひったくり，取り調べ，貸し出し，貸しきり，繰り上げ，乗り換え
 - b. 動作・作用の内容
考え，教え，読み，話，語り，望み，楽しみ，たくらみ，願い，悩み，祈り，勤め
 - c. 動作・作用のありさま・方法・程度・具合・感じなど
暮らし，構え，育ち，成り立ち，付き（が回ってくる），滑り（がいい），すわり（が悪い），出来（がいい），当たり（が柔らかい）
10. 動作・作用の所産・結果
 - a. 他動詞から
写し，控え（をとる），包み，貯え，稼ぎ，もうけ，見積もり，きざみ（たばこ），握り（寿司），ちらし（を配る），借り／貸し（がある），彫り，飾り，おろし，盛り（そば），（鯔の）開き，（鰹の）たたき，煮込み，差し入れ，書き置き，書き下ろし，盛り合わせ，綴じ込み，割り当て
 - b. 自動詞から
（落語の）落ち，余り，残り，固まり，聞こえ，響き，氷，しみ（染），はげ，腫れ，（肌の）荒れ，へこみ，ゆがみ，破れ，ひび割れ，むくみ，かぶれ，吹きこぼれ，ほころび，よごれ，誤り，狂い（がない），へだたり，ずれ，違い，入り（が悪い）
11. 動作・作用の主体
 - a. 人をあらわす
忍び，もぐり，迎え，（落語の）取り，見張り，見習い，手伝い，付き添い，取り巻き，呼び出し（相撲），飛び入り，跳ねっ返り，欲張り
 - b. 人以外
流れ，群れ，妨げ，支え，浮き，代わり，続き，つぼみ，しがらみ，おまもり，お化け，生まれ変わり
12. 動作・作用の受け手
○つまみ，開き，引き出し，引っかかり，ねじ，合わせ，まわし，まとい，重ね，連れ，連れ合い，たより（にする）
13. 動作・作用の手段・道具
○はかり，はたき，はさみ，ふるい，つなぎ，しぼり（カメラ），こやし，せき（堰，関），囲い，おはらい，お弔い，おひろめ，（お）祭り
14. 動作・作用の行なわれる場所
○（文の）はじめ／終わり，通り，渡し，（町の）はずれ，（地の）果て，とまり（宿，港），張り出し（窓），受け付け，（台所の）流し，まわり，振り出し（すごろく），書き出し，並び（にある），かくし（ポケット）
15. 動作・作用の行なわれる時間
○暮れ，始まり／終わり，行き／帰り，休み，締め切り，はね（終演），（彼岸の）入り，お開き